

公爵家に生まれて初日に跡継ぎ失格の烙印を

押されましたが今日も元気に生きてます！

登場人物紹介

ソフィア

跡継ぎ候補の一人。
優しい性格をした、
とても可愛い女の子。
エトワのことが大好き。

スリゼル

跡継ぎ候補の一人。
子供たちの中で一番大人っぽい。
エトワとの心の距離はやや遠い。

エリデ男爵

二十代前半の青年。
風の派閥と深い関わりが
あるようで……？

リンクス

跡継ぎ候補の一人。
面倒見がよく、
頼れる兄貴分的な存在。
エトワのことをいつも
気にかけている。

ミント

跡継ぎ候補の一人。
無表情でぶっきらぼう。
エトワに対しては優しい。

クリュート

跡継ぎ候補の一人。
キザで腹黒な少年。
なんだかんだ根が素直。

天輝^{てんき}

金の鳥をかたどった剣。
エトワの能力の大半が
封じられている、
頼れる相棒。

エトワ

風の公爵家の令嬢。
魔力がほぼないので跡継ぎ失格の
烙印を押されていた。
元は普通の日本人で
かなりのマイペース。

目次

第一章	ソフィアちゃんたちの里帰り	7
第二章	いざソフィアちゃんの家へ	14
第三章	リンクスくんのお家	45
第四章	「遭難してますか?」「そうなんです」	74
第五章	ミントくんが変	116
第六章	スリゼルくんのお宅訪問 (クリュートくんのお宅も行ったよ!)	174
第七章	穏やかで優しくきれいな場所	200
おまけの章	エルフィスちゃんと斬鉄	287

第一章 ソフィアちゃんたちの里帰り

みなさまいかがお過ごしでしょうか、エトワです。

交通事故で文字通り他界して、やってきたのは異世界。

そこで過ごして、はや十年、思い返すといろいろありました。

魔力を持つて生まれてこなかったことから、生まれて初日に跡継ぎ失格の烙印を押されて、殺されるか追放かと思ったら、十五歳になるまでは面倒を見てもらえるらしく、貴族の支援を受けてのまったりライフ。

かと思ったら、私の代わりにシルフィール公爵家の跡継ぎ候補になった五人の子供たちがやってきて、どたばたの大騒ぎ。最初は反発されることもあったけど、今では家族みたいな存在に。

進学した貴族学校ルーヴ・ロゼではつまはじきにあっただけど、侯爵家のお嬢さまパイシェン先輩と仲良くなって、そのコネで学校のトップに君臨する貴族が所属するサロンの桜貴会に入れてもらったり、生徒会活動にいそしんだりして、それなりに馴染んできたところですよ。

他にも冒険者学校にも通うようになったり、アルミホイルを作ったり、冒険者のパーティーに参加させてもらったり、アルミホイルを製造する商会を立ち上げたり……いろいろ、うん、いろいろ

ありました。

最近はどうと……まったく覚えてないんだよねえ。

十三騎士のアグラって人（とても迷惑な人）に襲われて、ずっと意識を失ってたらしいんだけど、目覚めたときには○ッ○ルペンシルさんが喋るようになっていました。めでたい。

相棒で私の力を封印してくれている天輝さんも元気です。めでたい。

ついでにアグラさんにも復讐できてすっきり。めでたい。

めでたいづくしで家に帰ってみると、私の血縁上のお母さん、公爵家夫人のダリアさまが戻ってきました。失格者の私を産んだせいで、精神的ショックを受けて隠居していたって噂だったから、恨まれてないかとドキドキしたけど、パーティーで顔を合わせたときは、そんなに嫌われている感じではなかったかな……？

私がかつたと言っているのかわからないけど、ホッとしたかも。

そんなわけで、私は今日も元気に生きてます！

* * *

ソフィアちゃんたちが里帰りすることになった。

実を言うと、今までも二、三日は帰ったりしていたのだ。でも、そのときは一人ずつだったし、私の護衛があるからとすぐに戻ってきていた。

今回の里帰りは、学校の長期休みの期間中で、その長さは一ヶ月半ほど。公爵家で六年間がんばってきたソフィアちゃんたちへのご褒美みたいなものだった。

ソフィアちゃんたちのお父さん、お母さんも、この時期に合わせてお休みらしく、一緒に過ごせることになっている。

せっかくだから家族水入らずの時間を邪魔するまいと、静かにみんなを送り出そうと思っていたけど、そんな私にソフィアちゃんたちから提案があった。

「エトワさま、私たちの家にいらっしやいませんか？」

「えええつ、さすがにそれはソフィアちゃんたちのご両親に申し訳ないよ。私は六年間もみんなと一緒に過ごさせてもらってるわけだし」

「家族で過ごす時間はたっぷりありますから大丈夫です。エトワさまが私たちのところに一週間ずつ滞在してくだされば、みんな平等にエトワさまと過ごせます」

うんうん、とミントくんとリンクスくんが頷いている。すでに二人には話が通っているらしい。「えつ、その話だと僕の家にも来るんですけど……本気ですか？」

クリュートくんだけ、びっくりしたあとちよつと嫌そうな顔をした。話が通ってなかったらしい。「我が家はいつでも歓迎ですよ。もちろん最終的にはエトワさまのご意志にお任せしますが」スリゼルくんはいつもの感情の見えない笑顔だ。

うーん、どうしよう。正直、みんなのご両親に会ってみたいという気持ちはある。仕事が忙しいらしく、今まで会ったことがなかったし。でも、本当にお邪魔していいものだろうか。

ソフィアちゃんたちは歓迎してくれているようだけど、クリュートくんなんかは露骨に嫌がつるし。

そう思ったら、背後から声がかかった。

「行つてきなさい」

「お母さま……!? あつ、いえ、ダリアさま」

背後の扉から、部屋に入ってきたのは私のお母さまことダリアさまだった。

お母さまは社交界に復帰したあと、溜まりに溜まっていた仕事をこなすために国中を飛び回っていたけど、数日前に別邸に帰ってきていた。仕事はまだまだ残っているそうだけど、いい仕事をするためには休息が必要だと家臣たちにジタバタ主張して、休暇を勝ち取ってきたらしい。

帰ってくるという表現が正しいのかはわからないけど、この家はお父さまとお母さまのものなのだから、おかしくはないはず。

それよりも、お母さまと呼んでしまったのがまずかったかもしれない。呼び慣れているお父さまについてはちゃんと名前で呼べるんだけど、お母さまはまだまだ顔を合わせる機会に慣れてないから間違ってしまう。

ほら、呼び間違ってしまったせいで、お母さまの眉間にシワが寄っている。ここは素直に謝ろう。

「ごめんなさい、ダリアさま」

「いえ……その……別にいいのよ……お母さまと呼んでも……」

「いえいえ、しつかりやらせていただきます！」

生まれたときのあれこれで迷惑をかけたし、こうして家にも置いてもらってるのだから、できるだけ気持ちよく過ごしてもらえる応対をしたい！

ギュッと握り拳を作ってガッツポーズを見せた私の思いとは裏腹に、その後、数秒間ちよつと気まずい沈黙が流れた。

うーん……えつと、あれ、なんの話してたんだっけ。

「コホンッ、とにかく行つてくるといわ。シルウェストレの人たちなら、あなたを無下に扱ったりはしないでしょう」

そうそう、ソフィアちゃんたちのお家を訪問するという話だった。

「それに、あなたに渡さなきゃいけないものがあるのよ……」

気が進まなそうにそう言うお母さま。渡さなきゃいけないものとはいったいなんだろう。

首を傾げる私に、手渡されたのは一枚の手紙。

『エリデ男爵より エトワさまへ』

封筒にはそう書かれている。

エリデ男爵……? 聞き覚えのない人物だ。

「公爵家の老人たちがそろそろ会わせる時期だろうって勝手に話を進めていたの。私は反対したのよ……」。でも、クロスウェルさまは本人に選択肢を与えるべきだろうって……」

どうやらこの手紙を私に渡すことについて、公爵家全体の意思が反映されているらしい。どうしてかお母さまは手紙を渡したくなかったようだ。

「開けてみてもいいですか？」

とにかく、内容を知らないことには、どのように反応していいかわからない。お母さまがこくと頷いたので、私は手紙を開いて、中の文章を読みはじめる。

「これは……招待状ですか？」

手紙の内容を要約すると、そんな感じのことが書いてあった。エリデ男爵という人が私をお家にお招きしようとしているらしい。

お母さまがため息をつきながら頷く。

「ええ、そうよ。エリデ男爵の所領は、アリエル侯爵家の領地から南西に行ったところにあるわ。不本意だけど、そこに旅行する予定があるならちよいどいいのよ。それに他に予定があれば、老人たちも長期休暇の間、ずっと男爵領にいろと言うことはないでしょ」

アリエル侯爵家はスリゼルくんのご実家である。

お母さまの口ぶりからすると、どうにも招待を受けることは強制のようだ。

「わかりました。ソフィアちゃんたちのお家を回ったあとに行ってみます」

困らせるのもあれだし、そもそも私としては断る理由がないから、招待を受けることにした。そうなると、護衛役の子たちのお家巡りはスリゼルくんの家が最後になる。

うーん、エリデ男爵家ではいったい何があるんだろう。気になるけど、お母さまはあんまり話したくなさそうだった。

最後にお母さまは膝について私と視線を合わせると、真剣な表情で言った。

「誰にどんなことを言われても、あなたの意思で決めていいんだからね……」

よくわからないけど頷いておいた。

その後、ソフィアちゃんたちとお家訪問の予定を詰めたあと、部屋に戻ってきた。

私はベッドに寝転がりながら、もう一度手紙を開く。

そこにはきれいな字で、こう書かれていた。

『エトワさまへ』

今年の長期休暇は、ぜひ我が家に遊びにお越しください。温かな家と静かな場所があなたをお待ちしています。

忘れられた地の領主 エリデ男爵より』

第二章 いざソフィアちゃんの家へ

長期休暇の一日目、私たちは家の門の前に集まっていた。

これから飛行船を使ってそれぞれのお家に行くんだけど、庭に五台もの飛行船が集まっていたら、貴族用の住宅地であっても注目を浴びてしまう。

そもそもルヴェンドの街の上空を飛行船が飛ぶだけで、ニュースになってしまいうぐらい本来は貴重なものだ。

そんなことになるのは、ソフィアちゃんたちも望まないもので、これから一旦郊外まで徒歩で移動して、そこで乗り込む予定。

「そろそろ、行きましょう」

スリゼルくんの声かけで、みんな歩き出す。

私は雑談がてら、みんなに質問しておきたいことがあった。

「みんな、エリデ男爵って知ってる？」

私より社交界に詳しいソフィアちゃんたちなら、何か知っているのではないかと思ったのだ。ソフィアちゃんの首が可愛らしく傾く。

「私もほとんどの家名は把握しているつもりなのですが、まったく聞いたことがなくて……」

「僕も社交界で会ったことはないですね」

珍しくクリュートくんも答えてくれた。

「調べてみたけど、一応、本当に存在はするみたいだ。王国の貴族名簿には名前が載っていた」

「リンクスくん、わざわざ調べてくれたんだ!? ありがとう!」

「別に、お前のためならこれぐらい……」

お礼を言うと、照れた表情でリンクスくんが顔を逸らす。

ミントくんがいつもの無表情で、顎に親指を当てながら言った。

「俺も会ったことはないが……風の派閥と深い関わりを持つ者なのは間違いないはずだ……」

「ええ、そうなの!？」

「そうですね」

驚く私とは違い、ソフィアちゃんをはじめ他の子たちはそうだろうなという表情で頷いている。

「なんでわかるの?」

聞いたことも会ったこともない人物について、どうしてそんな確信がもてるのだろう。しかも、みんながそれを確信しているようだった。

「エリデ男爵の所領がある場所は、完全根絶地域かんぜんこんぜつちいきなんです」

「か、かんぜんこんぜつちいき……?」

なんかいきなり難しそうな単語が出てきた。

ソフィアちゃんに続いて、リンクスくんも教えてくれる。

「風の派閥の活動により魔物や魔族たちの脅威がほぼ完全に排除された地域のことだ。その土地にいる魔物や魔族を倒すだけでなく、魔物が伝播してくる森林の伐採をはじめとする地形の改造、さらに周辺地域にも大規模な魔物除けをおこなうことにより、魔物や魔族の被害が三十年以上起こっていない場所がそう呼ばれてる。実際のところ、そう呼ばれる場所ではもう五百年以上、魔物の被害がでてない」

うーん、なんかいろんな意味ですごいことだなあ。

私が元いた世界で同じことをしたら、大問題になりそうな気がする。でも、地球の野生動物よりさらに恐ろしい魔物や魔族の脅威があるこの世界では適用される倫理も少し違うものになるのかもしれない。

「さすがに風の派閥でも、この規模の活動は負担が大きく、完全根絶地域とされる場所は現在二十もありません。特にエリデ男爵の所領がある地域は、私たち風の一族が初めて完全根絶を成したとされる場所で、シルフィール家にとっても特別な場所とされています。だから、その土地に住んでいるのは風の派閥に縁のある者たちが多いんです」

なるほど、そういうことだったのか。風の派閥にとって重要な土地に住んでるから、風の派閥の関係者。説明されてみると、わかりやすい。

「ありがとう。みんなのおかげでエリデ男爵について少しだけわかったよ」

何も情報が掴めないと思っていたけど、少しその背景を知ることができた。あとは直接会ってみるしかないかもしれない。いったい、どんな人なんだろう。

そんなことを考えながら、途中で買い食いなんかもしちゃって、リンクスくんたちが街の女の子にキーカー言われたりしつつ、郊外までやってくる。

そこには飛行船がもう待機していた。そして注目を浴びないように郊外で乗ることにしたというソフィアちゃんたちの努力も虚しく、野次馬が飛行船を見に集まってきた。貴族への畏れからか近寄ってくることはなく、遠巻きにしているだけだけど、レジャー感覚で眺められている。お昼頃なのでシートを敷いて、お弁当を食べ、家族団欒をしながら眺められている。

そんなに離れていても、ソフィアちゃんたちやんごとなき生まれの人間が発するオーラは届くらしい。五人が飛行船に近づいていくと、野次馬の人たちがざわついた。

「これはゆっくりしてる暇はなさそうだねえ」

「そうですね。変に慣れて近づいてきたら厄介です。事故が起こらないように早く飛び立ちましょう」

スリゼルくんがちよつとひどいけど、もつともなことを言う。

「私たちの船はこちらです、エトワさま！」

ソフィアちゃんがニコツと笑顔で私の手を引く。最初に向かうのはソフィアちゃんのご実家だ。

「エトワさま、俺の家にも絶対来てくれよな！」

別れ際にリンクスくんがそう言う。

「うんうん、絶対行くよ」

むしろ行かない理由があったら教えてほしい。

「待っているぞ……」

ミントくんもそう言って去っていった。一応、歓迎してくれているみたい。クリュートくんとスリゼルくんは特に何もなし。まあ、二人は私のお家訪問が内心嫌なのだろう。でも、あちらからはつきり言わないなら、私からは寄らせてもらう所存である。

特にスリゼルくんとはこんなに長年一緒に過ごしていても、悲しいことに明確に距離がある。これがきっかけで親交が深まるかもしれないし。

「それじゃあ、行きましょう！」

「はーい、お邪魔します」

ソフィアちゃんの言葉にそう返してタラップを踏んだ。まだソフィアちゃんの家についたわけではないけれど、よそさまのお家の飛行船に乗せてもらうからね。

飛び立つてから数時間、飛行船は地上へ降り立った。

お付きの人に導かれて飛行船を降りると、目の前に草原が広がっていた。草原は丘や建物など遮るものなく、遠くの山のほうまで続いている。とてもきれいな景色だった。

その美しい草原に一組の男女がいた。二人ともとても整った容姿で、特徴的な銀色の髪をしている。

それはソフィアちゃんの髪と同じ色。

すぐにわかった。ソフィアちゃんのご両親だ。

ちよつと意外だったのは、お二人とも銀髪だったことだろうか。だってあれほど美しい髪色の人は何人もいるとは思えず、どちらかの親御さんからの遺伝だと思い込んでいたからだ。

いや、もしかしたらほんとに兄妹なのかも？ どちらかがソフィアちゃんの親御さんで、もう片方はそのご兄妹？

頭が混乱してきたけど、答えはすぐわかった。

「お父さま、お母さま！」

ソフィアちゃんがそう言って二人に駆け寄っていったからだ。

私は最初の直感が外れてなかったことにほっとした。

ソフィアちゃんのご両親は、抱きつくソフィアちゃんの頭を撫でると、私のほうへ歩いてくる。

「はじめまして、エトワさま。ソフィアからあなたのお話はたくさん伺っておりましたので、ひと目見てわかりました。私が現フィン侯爵家当主のレイルスです」

「妻のルフニアです。噂通りの素晴らしい方ですね」

レイルスさんはかっこよくて若々しくてソフィアちゃんのお兄さんみたいに見える。ルフニアさんは銀色の髪をボニーテールにしている、運動中のソフィアちゃんの姿を思い起こさせた。ソフィアちゃんが大人になったらきつとこんな風に美人になるんだと思う。

でも、噂ってなんだろう。自分がどんな風に伝わってるのか気になるぞ。ソフィアちゃんのことだから悪くは言われてないと思うけど、それはそれでプレッシャー。

「よ、よろしくお願ひします。エトワです。一週間ほどお世話になります」

私はちょっと緊張しながら深々と頭を下げた。

「はは、そこまでかしこまらないでください。ルヴェンドではソフィアのことを妹のように大切にしてください。聞いております。私たちのことも、どうか家族のように思ってください」

ソフィアちゃんパパ、レイルスさんがピカーッと輝きを放つ笑顔で言った。

……いえ、厳しいです。二人の容姿が神々しすぎて、家族どころか、自分と一緒に生き物のカテゴリーとすら思えない。

ソフィアちゃんも天みたいな美少女だけど、幼馴染補正で妹だと思える。でもお二人は無理。「レイルスさま、エトワさまは長旅でお疲れでしょうから、まずお家に案内してさしあげるのがよろしいかと」

そう言ってくれたのは、私を飛行船で送ってくれたお付きの人だった。

馬車が貴族の基本的な移動手段のこの世界では、街から街へ移動するだけでも数日かかることがある。今回は飛行船で数時間だから長旅とは言わないかもしれないけど、やっぱりちょっと疲れているかもしれない。

「ああ、そうだな！ 申し訳ありません、エトワさま。どうにも私は気が利かないたちのようで、ゴルデスに注意されないと、こういうことに気づけないですよ。すぐに家に案内します」

お付きの人はゴルデスさんというらしい。執事っぽい格好をした優しそうなお爺さんだ。

「いえいえ、気を遣わせてしまつてすみません。それで、その……お家はどちらに……？」

私がお家の場所をたずねたのも当然だった。

飛行船から降り立ったときに表現した通り、この辺りは草原しか見えないのだ。もちろん、草原はずっと山のほうまで続いていて、それを遮る丘も建物もない。まさか侯爵家の家が地下にある……なんてことはないはずだ。

「私たちの家は、ここから十キロ離れた山の上にありますわ」

そう言つてソフィアちゃんママ、ルフィアさんが指差した先には草原の向こうに見えていた山があった。

えっ、十キロ……？ じゃあ、なんでここに降りたの？

ああ、そっか。なんらかの理由で飛行船はお屋敷に停められないから、ここからは馬車で……そう考えながら、なぜか私の心はだんだんと嫌な予感に囚われはじめていた。

「じゅ、十キロ向こうにあるんですね……」

「はい、手頃な距離に綺麗な草原があつたので、そこでエトワさまをお迎えしたいと思い、二人で走ってきました」

そうかあ、十キロを走ってきたんですか。

うん、ここに着いたとき、二人の姿だけで馬車は見えなかったもんねえ……

「それではお家まで向かう手段というのは……？」

また飛行船に乗って移動したりするのかなー？

恐る恐るの私の質問に、答えは爽やかな笑顔で返ってきた。

「帰りはエトワさまと一緒に走りましょう」

「草原を走るのは気持ちいいですよ」

片道十キロを走ってきたとは思えない一片の曇りもない笑顔で、ソフィアちゃんのご両親はそう言った。

ちよ、ちよと待って、冒険者を志しているとはいえ、私の根っこは前世のころからインドア派。外に出る必要がないときは、家でだらだら本を読んで過ごしている。

そんな私に十キロのランニングはやばい。避けたい。ソフィアちゃん、助け……

「お父様とお母様とのランニング、久しぶりなので楽しみです」

元気っ子のソフィアちゃんは笑顔で応じる。ソフィアちゃん、ルヴェンドにいたときも、ちよくちよくランニングしてたもんねえ。

ん、これ逃げ場なくない？

私は一縷の望みをかけて、お付きの人、ゴルデスさんのほうを見た。

「フィン家を訪れる客人の間では、いきなり走って足を痛める事故が多く発生しております。ここは入念にストレッチされるのがよいかと」

そう小声で私にアドバイスをくれながら、ゴルデスさんはアキレス腱を伸ばす運動をしている。

あつ、ゴルデスさんも走るんですね……、逃げ場ないじゃん……

「さあ行きましょう、エトワさま！」

「私たちの家まで競走ですよ！」

こうして私のソフィアちゃんの家での生活がスタートした。まだ家にたどり着いてすらいなけれど……

次の日、私は筋肉痛で目を覚ました。

原因はもちろんあの十キロ走だ。あの突然始まったランニング、もちろん私は完走していない。

あの場の雰囲気の流れされて走り出してしまったけど、冷静に考えると、小学四年生の体に十キロ走は長すぎる。当たり前のように途中でダウンした私はレイルスさんにおんぶされて、屋敷にたどり着いた。そしてそのまま、ベッドの上で一晩を過ごしたのである。

「い、いだい……」

起きると体がギシギシいう。こんな筋肉痛になったのは前世を合わせても久しぶりだ。

「エトワさま！ 起きましたか!？」

私が起こした音を聞きつけて、ソフィアちゃんが部屋に駆け込んできた。普通、起きた音なんて部屋の外に聞こえるとは思えないけど、経験上そうなのである。ルヴェンドのお屋敷でも何度か同じような現象に遭遇したことがあった。

「うん、心配させちゃってごめんね」

私が謝ると、ソフィアちゃんは目尻に涙を溜めて、ぶんぶんとう首を横に振った。

「私のほうこそごめんなさい！ ついはしゃいでしまっ……エトワさまに無茶をさせてしまいました……」

「いいんだよいいんだよ、気にしないで。たとえ筋肉痛になったって、ソフィアちゃんが笑顔になってくれるなら、私はそれで幸せなんだから。だから泣かないでくれ」

ソフィアちゃんの頭を撫でる腕は、筋肉痛でプルプルと震えている。本当におばあちゃんになつてしまった気分だ。それでも私は全身全霊を込めて、ソフィアちゃんを慰める。

ソフィアちゃんは目に溜まった涙を拭いながら、可愛く微笑んで私に言った。

「今度は三百メートルから、いえ、三十メートルから始めていきましょう」

結局、走らされるのね、私。

朝食の席に行くと、レイルスさんとルフィアさんからも謝罪された。申し訳なさそうに体を縮めて、しょんぼりと謝る姿はソフィアちゃんとそっくりだった。

朝食が終わると、レイルスさんたちが領内を案内してくれることになった。もともとこの休暇で領内の様子を見て回る予定だったようで、私も一緒に連れていってくれるらしい。

「エトワさまのために馬車を手配いたしました」

私がいなかったら馬車は用意されなかったのだろうか……

用意してくれた馬車のシートはふかふか、スプリング付きで揺れを感じないようになってる、最高級のものであった。

貴族ならだいたいの家は持つてるものだろうけど、自分のために用意されたとすると、なんだか申し訳ない。でも、筋肉痛なので大人しくご好意に甘えさせてもらう。

「それでは出発いたします」

私が馬車に乗り込んだあと、御者もできるらしい執事のゴルデスさんが手綱を握り、そう言つて出発しようとするのを私は止めた。

「ちょっと待ってください」

「何か問題がありましたか？」

そう首を傾げるゴルデスさんに、私は糸のように細い目で窓の外を見る。

私の視線の先には、スタンディングスタートの姿勢で馬車の横に並んでいる銀髪の父^{おや}母子^こがいた。何をやろうとしてたかはもはや問うまい。

「乗ってくださいませんか？」

「「えっ」」

意外そうな三人の声が重なる。

「落着かないので」

有無を言わせぬ口調の私に、しょんぼりした表情で三人は馬車に自らの脚で収容されていった。

馬車が出発し、緩やかな坂道を下っていく。

ソフィアちゃんのお家は領地を見下ろせる小高い山の上にある。

昨日は気づかなかつたけど、この山の左右には壁のように急勾配の山岳地帯が広がっている。唯一、馬車でも登れそうな穏やかな傾斜の山の上に家が建っている感じだ。

「ふふ、どうしてあの場所に家があるのか気になりますか？」

馬車の窓からその景色をしばらく眺めていた私は、ルフィアさんにそう声をかけられた。

正直、それほど疑問に思っていたわけではない。どちらかというと、なんとなく眺めていただけだ。でも、言われてみると確かに……

「そうですね、景色はよさそうですけど、便利な場所には見えません」

いくら他の山々と比べてなだらかとはいっても、山の上は住むのに不便だと思う。

私が元いた世界では、山奥の土地は地価が安かったり、街の喧騒を避けられたりと一定の人氣はあったけど、それはよさげな平地がすでに家で埋め尽くされていたという事情があったからだ。

この世界なら、まだ平たい土地も余っているように思える。侯爵家の人たちなら、もったいい場所に家を作れたのではないだろうか。それこそ昨日着陸した草原とか。

「私たちの領地は、この国の南東にあります。この国から北は魔族たちの領域、南は人間の領域。

あの家は南東にある隣国を睨むような位置に作られていることになります」

そう答えてくれたのは、レイルスさんだった。

この世界には人が暮らす領域と、魔族たちが暮らす領域がある。

この国は人が暮らす領域の最も北に位置する。大陸の北にある魔族たちが暮らす領域に蓋をするように存在している。この国から南に行くと、多種多様な人間たちが暮らすたくさんの国が存在するらしい。私はこの国から出たことがないからわからないけれど……

「もし他国の侵攻があった場合、敵軍は平地の多いこの場所を通る可能性が高いでしょう。そのと

き、あの山脈が壁となり足止めとなります」

ソフィアちゃんの家がある山の左右を囲む山脈は、ずっと向こうまで続いていた。

軍を指揮したことはないのだからいいけど、確かにあの山を大人数で越えるのは大変そうだった。そうになると、比較的なだらかなソフィアちゃんたちの家が建っている山を越えるのが正攻法になるわけだけど……

答えを察した私の顔を見て、レイルスさんは微笑んでそれ以上の言葉を止めた。

つまり、私たちの国に攻め込んできた人たちが王都のある中央部に向かう場合、壁のような山を越えるか、王国最強クラスの魔法使いが住む家の側を通る必要がある。

うーん、私が敵軍の将なら……がんばって壁のような山を越えるほうを選ぶかなあ。そっちのほうがまだ希望がある……

まあ、この国が侵攻を受けたことは、はるか昔を除いて、まったくないんだけどね。

はるか昔、神話とっていいような時代、敵対者に国を追われたある国の王族たちは、魔の領域である北に逃げ込んだ。彼らはそこで精霊と出会い、強大な力を授かった。まあ、この精霊って私が親交ある魔族ハナコたちのこともまじってるんだなって思うけど。ハナコたちの話によると、人間と魔族との混血でこの国のご先祖様は強大な魔力を授かったらしいし。でも実際に精霊って存在もいるようで、それとも交流はあるみたいなので精霊と出会ったっていうのも嘘ではないと思う。力を得た王族たちは、復讐するのではなく、その場所に巨大な国を作り上げた。

最強の魔法使いたちが暮らす、世界最大の国を。

というのは神話だけど、実際この国の魔法使いたちは他国と比べて異様なほど強い力を持つてらしい。この国では大した実力者ではないとされる貴族が他国で魔法を披露すると宮廷魔術師になつてくれないかと勧誘を受けるぐらいたと聞いた。

そんな国と戦争したいという国は存在しないし、そもそも私たちの国が恐ろしい魔族の領域に蓋をしてくれてるのだ。わざわざ戦うメリットもない。

そんなわけで、この国が人間の国と戦争になったことは、歴史上まったくないのである。

それでも、ソフィアちゃんたちはその危機に備えて、常に準備をしているのである。王家の盾、風の一族というのはそんな存在なのだ……

いろいろと考えている間にも、馬車は進み続ける。

レイルスさんが言った通りこの地方は平地が多いようだった。山を下つてしばらく行くと草原に囲まれる。

乾燥した風が窓から入ってきて、ソフィアちゃんの髪の毛を揺らす。綺麗な銀色の髪の毛はゆらゆら揺れながら、私の頬をくすぐった。少しこそばゆい。

「エトワさまの髪がくすぐったいです」

私の髪も、ソフィアちゃんをくすぐっていたようだった。私たちは顔を見合わせて微笑みを浮かべた。

窓の外には先ほどまでの青々とした草原とは違い、少し枯れた草と点々と転がる白い岩が見える。今まで見たことがない景色だった。

馬車がしばらく穏やかに進み続けると、きれいな湖と、その横に立ち並ぶ白い建物群が見えてきた。

「あれは、私たちの家から一番近い街です。少し寄っていきましようか」

レイルスさんの提案通り、馬車が街の入り口で止まる。

私たちは街に降り立つ。

街の第一印象は、とっても白いということだった。

家の壁が真っ白な漆喰のような素材でできている。石畳も白い石を加工したもののようだった。

「この周辺では石灰を含んだ石がたくさん採れるんです。それを建材にした家が多く建てられています」

ルフィアさんが、そう教えてくれた。

街の門から入ると、その近くで遊んでいた子供たちがソフィアちゃんたちを見て目を丸くする。

「フィン侯爵さまたちだ！」

「ちょーちょーに連絡だ！」

子供たちはそう言つて、どこかへと走っていつてしまった。

近くで洗濯していた女性がその様子を見て慌てた様子で駆けてくる。水桶では泡がぶくぶくしていた。

「あの子たちったら挨拶もせずに、申し訳ありません」

「いえいえ、ちょっと様子を見に立ち寄っただけなので気にしないでください。とは言つても、町

長がこちらに挨拶に来そうなので、私たちも向かったほうが早そうですね」

レイルスさんは気さくな感じで女性に应对する。その姿は、学校でのソフィアちゃんの振る舞いとよく似ていた。

「ご案内いたしましょうか？」

「いえ、大丈夫です。道は知っていますし、あなたも仕事中的ようですから」

ソフィアちゃんたち家族についていきながら街を見学していると、街の不思議な点を見つけた。家の玄関のすべてに銀色の槍が置かれている。コンビニやスーパーに立てられているの、ぼり、みたいに、家の軒下に丸い筒が立てかけられ、そこに槍が入っているのだ。一家に一本。魔除けのおまじないみたいなものなのだろうか。

さらに少し進むと、体格のいい男の人たちが釘とハンマーで石を叩いて加工していた。

「この街では石材を加工して、外の街にも売っているんです。いい石材は貴族の間でも高値で取引されます」

「へー、きれいですね」

横に並べられた、完成品と思しき石材は、滑らかでつるつる光っていてなんだか高級感があった。パイシェン先輩の家にあつてもおかしくないかもしれない。

加工場で働くお兄さんたちが、こちらに気づいて手を振ってきた。

「おー、フィン侯爵さま！ お久しぶりです！ ご視察ですか？」

「ええ、みなさんもお変わりないようで」

「はい、俺たちは元気だけが取り柄ですから！」

そう言つて、力こぶを作るお兄さんと笑顔でやりとりする、ソフィアちゃんご家族。みんなから慕われているようだった。

お兄さんたちに挨拶して、町長の家へ再び向かうと、向こうからぞろぞろと人が来るのが見えた。「あの方が町長さんです」

真ん中にいる、揃い髭のご老人が町長さんらしい。町長というより、長老といった風体だった。町長さんとお付きの人たちもこちらに気づいたようで急いで駆け寄ってくる。そしてソフィアちゃんたちの前に来ると、全員がズバツと頭を下げた。

「フィン侯爵様、ようこそ我が街においでくださいました！」

それをレイルスさんが手で制する。

「顔を上げてください。少し立ち寄っただけですから」

「そうですか、それでは早速……」

町長さんは顔を上げると、近くの家に置かれていた銀の槍に手を置く。

なんかの礼儀作法なのかな、とそう思ったら、それを引き抜いて。

「いざ尋常に勝負願います！」

槍を振り回し、私たちに飛びかかってきた。

えええええ……

——拝啓、お父さま、お母さま。

まだ一日しか経ってませんが、心の中で手紙を書こうと思います。

ルヴェンドの家を離れた私は、護衛役の子たちのご実家で平和に過ごしています。

昨日は倒れるまで走らされ、今日は訪れた街の長、あらため町長さんが槍を持って、私たちに飛びかかってきました。

そんな平穏な生活に、ルヴェンドでの生活がちよつと懐かしく感じてしまいます。

「私がお相手します」

いつの間にか槍を持っていたルフィアさんが、みんなの前に立って町長さんの槍を受け止める。キンと金属がぶつかる甲高い音が周囲に響く。そしてルフィアさんはそのままくるっと槍を回し、投げ技のように器用に町長さんを地面に倒した。

「ぐはっ、参りました！ さすが奥方様。不意打ちにもかかわらずあの素早い対応。何より、いつ見ても美しい槍捌きでございますな」

町長さんはすぐに白旗を上げた。

私の目の前で町長さんとルフィアさんが談笑している。

「さすが奥方様。不意打ちにもかかわらずあの素早い対応。何より、いつ見ても美しい槍捌きでございますな」

「町長さんも八十歳を過ぎてるとは思えない見事な一撃でした」

「いえいえ、最近はめっきり跳躍力が衰えてきて、鍛え直さねばならんなと思っていたところですよ」

いきなり槍を持って飛びかかってきたのにもかかわらず、ははは、とまるで日常会話をしているみたいに和やかな雰囲気が出る。

ソフィアちゃんも、レイルスさんもニコニコしていた。

ただ一人、流れについていけない私に、ソフィアちゃんが教えてくれる。

「この街では、みなさん槍の訓練をされているんです。こうして私たちが訪れたときには、地稽古を挑まれます」

「なぜに……」

「ははは、他国が攻めてきたとき、侯爵家の方々だけを戦わせるわけにはいきませんからな。私たちも常に戦う準備をしておるわけです」

「もしそんな事態が起きたら、ちゃんと逃げてくださいと、僕は毎回言ってるんですけどね」

レイルスさんの話によると、街の人たちが自主的にやっているようだった。

そうこうしている間に鐘が鳴る。どうやらお昼を知らせるものようだ。朝の仕事や家事を終えた人たちがぞろぞろとこの場所にやってくる。

街の人たちの目当ては、もちろんソフィアちゃん家族だ。

「奥方さま、私も稽古をお願いします！」

「はい、かまいませんよ。どんどんかかってきてください」

やってきた人たちは、次々とソフィアちゃん家族に槍の稽古を申し込む。

「ソ、ソフィアさま、僕と戦ってください！」

「ええ、かまいませんよ。よろしくお願いします」

ソフィアちゃんに挑むのは、同じ年頃の少年たちが多い。列を作る少年たちの頬は少し赤みを帯びている。きっとこの街でソフィアちゃんに初恋を奪われた男の子はたくさんいるんだろうなと思って。思った。

中にはぐつと拳を握って、何かを決心している少年もいた。たぶん、稽古に勝ったら告白するんだ、とか考えてるのだろう。

「フィン侯爵さま！ 私と稽古をしてください！」

「ええ、いいですよ」

真つ赤な顔で叫んだのは、街に入って最初に迎えてくれた洗濯をしていた女性だった。

ここまで走ってきたのだろう、息を切らしていたが、顔が真つ赤なのは別の理由だと思う。おそらく、レイルスさんのファンだろう。稽古をしてもらいたくて走ってきたっぽいことが察せられた。そうしてソフィアちゃん家族の前に、稽古を求める長蛇の列ができてしまった。

槍術なんてからっきしの私は見学しているだけになる。

それにしてもレイルスさんもルフィアさんも、ソフィアちゃん自身もかなりの強さだった。

ソフィアちゃんは告白目当ての男子を全員粉砕してしまったし、レイルスさんは爽やかな笑顔で全勝している。特にすごいのはルフィアさん。石切場で働いていた屈強な男性たちが挑戦していたけど、一振り二振りで決着をつけてしまう。たぶん、家族の中でも一番強いのはあの人だろう。

全員、魔法使いの親子のはずなだけだなあ……

護衛役の子たちが武芸にも秀でているのは知っていたけど、ここまでとは思わなかった。

「おい、お前誰だ？」

ちようどよさそうな段差に座って見学していたら声をかけられた。ソフィアちゃんに挑戦している少年たちより、少し幼い子供たちだ。

「ソフィアちゃんの家にお世話になってるエトワだよ。よろしくね」

私から見ても年下の子供なので、手を振っておく。

どうやら小さい子供は槍の訓練には参加させてもらってないみたいだ。金属製の槍はかなりの重量がありそうだし、体がしっかりと成長するまでは持たせてもらえないのだろう。

「ふくん、変な目と模様」

子供は正直だ。男の子は私の額に刻まれた失格の印と糸のように細い目を変だとズバツと指摘したあと、興味なさげに走って行ってしまった。他の男の子もその子を追いかけていく。

「ねえねえ、あなたは槍の訓練しないの？ 私たちはまだできないんだけど」

男の子たちはみんな去ってしまったけど、女の子はまだ私に興味を持ってくれているのか残っている。

「いやあ、槍なんてまったくできないからねえ」

「エトワさまは槍は習っていませんが、剣の名手なんですよ！ 天才と呼べるような腕前なんです！」

いつの間にか私の隣に移動してたソフィアちゃんが自慢げに周りに宣言した。



「ほう、天才！」

「天才ですか」

「天才とは」

天才というフレーズが注目を集めてしまった。

「いえ、そんな大したものじゃないです。ほんとに。ほんとうに……」

すっかり見学気分だったのに、衆目を集めることになってしまつてかなり恥ずかしい。

「たぶん、お世辞だぜ。だつて見るからに弱そうだもん」

「うん、ソフィアさまたちと違つてのろまだし」

向こうに走つていった男の子が戻つてきてそう言つた。この子は私に恨みでもあるのだろうか。でも、そう思われているほうが気楽なので否定はしない。

しかし、それに怒つたのはソフィアちゃんだった。

「違います！ エトワさまは本当の天才なんです！ みなさんも一度戦つてみればわかります！」

ぷくつと頬を膨らませ、駄々っ子みたいに怒り出す。

今まで令嬢モードのソフィアちゃんしか見せてこなかったのだろう。急に年相応の態度を見せた

ソフィアちゃんに、街の大人たちはおろおろと焦り出す。

「剣は！ 剣はありませんか！ それと、エトワさまに見合うような対戦相手を！」

ソフィアちゃんがこんなにながまを言うのは珍しい。

街の人たちは大慌てだ。

「け、剣ですか!? この街は代々、先祖から受け継がれた槍しか置かれてないので……」
どうやらこの街で剣を調達するのは難しそうだ。

「対戦相手は見つかりました! 去年の槍術大会で優勝したジークです!」
いや、そつちも見つけなくていいから……

「ええ!? 今日、僕休みもらえるはずじゃなかった?」

寝巻を着た青年が、手を引かれて広場にやってきた。……なんか、ごめんなさい。

「剣は見つからなかったですけど、切り出す前の剣っぽい形の石なら見つかりました!」
なぜにそんなものが……?

細い棒状の、確かに剣っぽい形をしてないこともない石を私はとりあえず受け取った。

「それでは……」

町長さんがそう言つて、開始の号令をかけようとしたけど……いやいやいや。

「町長……鉄の槍と石の剣では勝負にならないかと……。特にこの周辺の石は脆いものが多いので……」

言いたかったことを、対戦相手のジークさんが言ってくれた。

石灰岩は硬くても衝撃には弱い。鉄の槍と打ち合えばすぐに壊れてしまう。

別に勝ち負けにはこだわらないので、やつてもいいけど、それで負けたとしてソフィアちゃんが納得できるのかは謎である。

「ソフィア、落ち着きなさい」

「そうです、わがままを言い過ぎですよ」

レイルスさんとルフィアさんはソフィアちゃんを諷める。

事の発端となる発言をしてしまった子供は、ソフィアちゃんを怒らせてしまったため、涙目でガクガク震えていた。すでにその子の心の中は後悔でいっぱいだろう。

こんな勝負をしたところで、誰も得しないのだ……

「む……」

でも、ソフィアちゃんのほうもまだ拗ねている。こちらも涙目で頬を膨らませて、決してうんとは頷かない。何やら納得しがたいものがあるらしい。

街の人はみんなおろおろとしている。

ソフィアちゃんをどうやって宥めてあげたらいいものか考えていると、女の子の声が響いた。

「ちよつと、あんたたち! 槍は触っちゃダメって言われてたでしょ!」

声がしたほうを向くと、小さな子たちが鉄の槍を持って遊んでいた。大人たちの注目が私たちに集まっている間に、遊び始めてしまったようだ。

「わーい!」

五人がかりで槍を持って振り回している。かなり危ない。

「こらっ、お前たち!」

慌てて大人たちも止めに入ろうとしたけど、槍を取り上げる前に事件は起きた。

石畳に先頭の子がつかずき、それにつまずいてみんなが倒れて、槍が投げ出されソフィアちゃん

を怒らせた男の子のほうに飛んできた。

私はそれを見た瞬間、走り出していた。

（天輝さん、斬鉄を解放！）

『承知した』

斬鉄は一年前にたまたま私が取得したスキルだ。このせいで大変な目に遭って封印していたのだが、そのことについては今は語りたくない。

スキルの能力は、どんな武器でも刃こぼれせず、鉄くらいまでなら切断できるというもの。私は石の剣で鉄の槍を何度も斬りつけた。

ただ斬っただけだと、ばらばらにした槍はそのまま男の子に当たってしまう。だから、斬り方を調整して、斬ったあとの槍が誰にも当たらない方向に飛んでいくようにした。切断された槍が誰もいない方向に飛んでいく。

そして、それは空中でいきなりピタッと止まった。

振り返ると、ソフィアちゃんたちが魔法を発動させていた。三人とも飛んできた槍を魔法で停止させたようだ。たぶん、私が助けなくても男の子は無事だっただろう。

とりあえず、誰にも怪我がなくてよかった。ホッと胸を撫で下ろした瞬間、街の人から驚きの声が上がった。

「今の見たか！」

「石で鉄の槍を!？」

「まったく太刀筋が見えなかったわ！」

町長さんは感動したように涙を流している。

「なまぐらの武器を以て鉄を切り裂く。これぞ武術を極めし者の技。まさかこの老いぼれの目で拝めようとは……」

ジークさんが頭を下げていた。

「石の剣では勝負にならないなどと申し上げてしまい失礼しました。勝負にならないのは私の腕前のほうでした……」

いや、まったく失礼なこと言っていないし、謝らなくていいし……

その後、街に滞在している間中、助けた男の子や街の人たちからキラキラした瞳で見られることになった……

そしてソフィアちゃんはそんな私の横で、どこか誇らしげな表情をしていた。

あと、槍で遊んだ男の子たちはめちゃくちゃ叱られた。

もう、これでもかというくらい全力で大盛りで叱られ、私が街にいる間中、大泣きしていた。

街から帰ってきた夜。

私はソフィアちゃんと一緒にベッドに座っていた。今日は一緒に寝ることにしたのだ。

「男の子たち最後はちよつとかわいそうになるくらいだったねえ」

あの叱られようはすごかった。きっと二度とやらないだろうと確信できるぐらいに。

「危うく怪我させてしまうところだったので仕方ありません。……けど、私もあの騒動のきっかけを作ってしまったので反省してます」

ソフィアちゃんも完全に落ち着いたらしい。あの場でわがままを言ってしまったのを反省していた。

「ソフィアちゃんは普段がいい子すぎるから、たまにはああしてもいいんだよ」

私はその頭を撫でてあげる。

「でも、あの子たちを見ていると、リンクスくんが悪ガキだったことを思い出すねえ」

今では学校中から尊敬を集めているリンクスくんだけど、昔は暴れん坊だった。調子に乗って、立ち入り禁止の遺跡に入ってしまった、みんなの命の危機を招く大事件を起こしてしまった。

リンクスくんはそのことを反省してどんどん成長していったのだ。今日事故を起こした男の子たちもそんな風になってくれると信じている。

「あのときエトワさまに助けていただかなければ、私たちの命はありませんでした。エトワさまはすごいお方です」

「いやいや、ソフィアちゃんたちが私を守ってくれたから、力の解放が間に合ったんだよ」

あのとき、護衛役の子たちに見捨てられていたら、天輝さんとも再会できず、みんなを守ることでもできなかったらう。そう考えると、あのころからみんないい子だったのかもしれない。その中でも……

「そういえばソフィアちゃんは最初から私のことをいろいろと気遣ってくれてたよね。他の子が

私を置いて遊びたがってたときも一緒にいてくれたり。クロスウェル様の指示もあったと思うけど、すぐく助けられてたよ。ありがとうね」

あらためてお礼を言うと、ソフィアちゃんは顔を赤くして焦り出した。

「あのとき……実はお父様とお母様のもとを離れて寂しくて……。エトワさまを初めて見たとき、お母様みたいな人だなんて思っちゃったんです」

「ええ!? ルフィアさんと違って全然美人じゃないけど!?」

「エトワさまは美人です! でも、そういうところじゃなくて、優しく私たちを見守ってくれるところとか、いつも穏やかで、でも本当はすごく意志が強いところとか……お話しするとお母様が側にいるみたいで安心できました。だから私のほうが一緒にいてほしいなって思っちゃってたんです」

あのとき、そんな風に思ってくれてたのか……

いろいろと私を助けてくれたのは、ソフィアちゃん自身の優しさが一番の理由だと思う。だけど、ソフィアちゃんの助けになれてたらすごく嬉しい。

「エトワさまの護衛を命じられていたというのに情けないです」

「ううん、そんなことないよ。そう思ってくれてたなんて、すごく嬉しいことだよ。話してくれてありがとうね、ソフィアちゃん」

あのとき、知らなかったソフィアちゃんの気持ちを知ることができた。知らなかったソフィアちゃんの家族にも会って話すことができた。

こうしてソフィアちゃんの実家を訪れてよかったなと思って。
それから、ソフィアちゃんのお家で過ごす五日間はあつという間に過ぎていって、毎日ランニングさせられ、治らなかつた筋肉痛と一緒に、次の子のご実家を訪問することになった。

第三章 リンクスくんのお家

ソフィアちゃんたちご家族にお見送りをしてもらって、私はフィン侯爵領を離れた。
向かう先は、リンクスくんのご実家。

だからだと空の旅を過ごさせてもらってしばらく。飛行船は半日もせずに地上に降り立った。
窓からはソフィアちゃんのお家に負けてない、大きなお屋敷が見える。きっとリンクスくんのご実家だろう。私は屋敷が見える位置に飛行船が降り立ったことにまず感謝した。

のっそりゆつくりと飛行船のデッキに出ると、懐かしいリンクスくんの姿が見えた。家は見える位置にあるのに、迎えに来てくれたみたい。

「リンクスくんやー!!」

「うわあっ!」

私は甲板を降りると、そのままリンクスくに飛びついた。

「急に飛びついてくるなよ!」

びっくりしたのか顔を真っ赤にして叫ぶリンクスくに、私はにんまりと微笑みながら言う。

「いやね……歩けないんですよ……」

私の脚はリンクスくんの体を支えにしてもなお、ガクガクと震え、そうしてるだけで全身から汗

が流れてくる。

「なんでそんな状態になってるんだよ！」

「それがね。ソフィアちゃんのお家で一週間、健康生活を送らされてしまったね」

この世界に転生した私は、アクティブに動き回る時期もあったけど、基本的には本を読んだりしてベッドやソファでだらだら過ごす日のほうが多かった。前世だって、基本的にはインドア派だったのだ。年に二度ある特定のイベントでは張り切ったりしてたけど……

そんな私が健康優良児たるソフィアちゃんの家で過ごしたのだから、たまらない。初日みたいな無茶はさせられなかったけど、きっちり健康的な生活は送らされてしまった。

その負担がここに来て一気に襲ってきたのである。

「こうなってしまったよ」

「なんでそうなるんだよ……いや、なんか察した」

リンクスくんは最終的にはわかってくれたようで、寄りかかる私を受け入れてくれた。

「あれがリンクスくんのご実家ですか？」

私がふるふる震える指で、見えていた大きなお屋敷を指差すと、リンクスくんは頷いた。

「ああ、そうだ。道中は支えてやるから、家に向かうぞ。とりあえず家に着いたら、休ませてやるから」

リンクスくんの手が恐る恐るといった感じで肩を掴んで支えてくれる。私は「優しい子になったね」とハンカチを取り出して、こぼれてきた涙を拭いた。

そのままリンクスくんを支えられて、見えるところにあるお屋敷に五分ほどかけてたどり着いた。門を潜ると、向こうから小さな男の子が走ってきた。

私はその姿を見て目を見開く……ことはできなかったのも、顔を精一杯びつくりさせた。

「ちっちゃなリンクスくんがいるー！ー！」

その男の子は赤い髪で強気そうな目つきをしていて、ちっちゃいころのリンクスくんにそっくりだったのだ。ちっちゃなリンクスくんは私を見ると、不審そうに目を^{すが}めた。

「リンクス兄さま！ 誰なんです、こいつは！」

私はその言葉にさらに衝撃を受けた。

リンクス兄さま!? ということは……この子……もしかして……！

細い目でじーーーーっと睨むと、リンクスくんが気まずそうに顔を逸らす。

「いや……何か……言い出しにくくて……」

確定である！ リンクスくんの弟だ、この子！

そりゃ、リンクスくんと一緒に暮らしてもう五年以上経ってるのだ。弟が生まれてもおかしくない年月ではあったけれど、でも、そんな考えがまったく抜け落ちていたせいか、ガンとショックを受けてしまった。

しかもしかも、当のリンクスくんからは教えてもらえなかったし……

「ほら、エトワさまは俺たちを家族みたいに思ってくれてるだろ。だから、教えたらショック受けそうだって思うと……」

それは凶星である。現に今ショックを受けている。でもでも。

「教えてくれなかったのはもつとショックです……」

思わず敬語になってしまった。リンクスくんとの間に今まで感じなかった心の距離を感じる……目尻に涙を浮かべた私に、リンクスくんが焦る。

「いや、悪かったって！ ごめん！」

「えっ、あれっ……？ というか、このこと知らなかったのつてもしかして私だけですか……？」
冷静に考えて、侯爵家に次男が生まれているのである。情報の伝わりやすい貴族社会でソフィアちゃんたちが知らないはずがない。

「いや、まあ、たぶん……あいつらは知ってるだろうなあ……特に話したことはないけど」
リンクスくんは頬をかきながら肯定した。

つまり、私だけ情報から隔離されていたわけだ。リンクスくんは弟が生まれたという重大な情報から……

「うっ……うっ……」

「だ、だから泣くなつて！ 本当に、本当に俺が悪かったから！」

涙をこぼす私に、リンクスくんは本当に困った顔をして手を合わせ必死に謝ってくれた。

「兄さまああ！ 誰なんですかああ！ こいつー！」

二人だけのやりとりで忙しくて、小リンクスくんを放置してしまっていた。

そのことに我慢の限界が来たのか、小リンクスくんの高い声が響く。

私は慌てて涙を止めて、ふらふらする体を起こして、小リンクスくんの前に立つ。

泣いている場合ではない。失った年月のブランドを取り戻さねば……！

「自己紹介が遅れました。私はエトワと申す者です。リンクスくんにとってはお姉さんみたいな存在です」

「それは違うけどな……」

リンクスくんはプイッとそっぽを向いて、拗ねたように唇を尖らせた。

ふふふ、照れなくてもいいのに。

「君もエトワお姉さんって呼んでくれていいんですよ？」

「俺は一回もそんな風に呼んだことないけどな……」

私は精一杯、お姉さんっぽい笑みを浮かべて、小リンクスくんにそう言った。

小リンクスくんは私を見上げ、しばし沈黙すると。

「……………絶対にヤダ！」

口を逆三角形に開いて、キッパリと断ってきた。

それから数分間、小リンクスくんには不審者扱いされたままだった私だが、最終的にお屋敷には入れてもらえた。

「エトワさま、ようこそ、おいでくださいました。僕がスカーレット家当主を務めるコーラル・スカーレットです」

屋敷に入つてすぐ、メガネをかけた優しそうな大人の人が現れた。

スカーレット侯爵家の当主、つまりはリンクスくんのお父さんだけど、なんていうかとても若々しい人だった。私のお父さまもかつてよくて若々しいけど、それよりさらに若いという感じで下手したら高校生ぐらいに見えるかもしれない。

「一週間お世話になります」

私が深々と頭を下げると、コーラルさんは苦笑いした。

「そんなにかしこまらず自分の家だと思つて過ごしてください」

「ありがとうございます」

ソフィアちゃんの家でも似たようなやりとりをした記憶がある。そんなお決まりチックな挨拶を済ませ、後ろで見守つてくれていたリンクスくんを振り返った私は、ニヤリと笑みを浮かべた。

「な、なんだよ」

「いやあ、リンクスくんつてお父さんとあんまり似てないんだなつて」

「リンクスは母親似なんですよ」

そこからコーラルさんはリンクスくんのお母さんについて教えてくれた。

現在、彼女はあるお方の付き人として他国を旅しているらしい。忙しく、音信不通になることも多く、今回の帰省でも帰つてきていないんだと。

リンクスくんによく似ているお母さん、会つてみたかったなあ。

「へえ！ あのだ……リンクスくんのお母さんつて、もしかしてすぐやんちゃ……元氣な方なんだ

すか？」

「ええ、やんちゃなお方でしたよ。初めて会ったときは、山賊の女頭領にでも絡まれたのかと勘違いしたほどです」

「わあ、そうなんです。リンクスくんも初めて会ったところは……」

私はそこで言葉を止めて、リンクスくんのほうを見てしまった。

リンクスくんは居心地悪そうに身じろぎをする。

「な、何が言いたんだよ……」

私はふふと微笑ましい気持ちになる。

「いやあ、昔はね、ほら」

「いつまで言われるんだよ、それ……五歳ぐらいまでの話だろう」

そうそう、リンクスくんがガキ大将を卒業してもう五年ぐらい経つのだ。上級生になった今では、後輩の面倒見もいいうで、学校では女子生徒からのアイドル的な人気にとどまらず、男子生徒からも兄貴分的存在な彼を慕う声が聞こえてくる。

「立派になりすぎて、お姉さんちょっと寂しいよ。たまには昔みたいにやんちゃしてもいいんだよ？」

「何度も言うけど、お姉さんじゃないから……」

仲良くなれたのに、お姉さんと言うことはしつかり否定される。今日はこれで三度目。

やれやれ、少しぐらい認めてくれてもいいのに。家族みたいに育つた間柄ではあゝりませんかあ。